

う。

本文をまとめるにあたって資料や写真の提供などまた適切な助言などは加賀美敏郎, 秋葉 力, 小椋環をわずらわした。これらの諸氏に心から感謝したい。本文中ではすべて敬称を省略させていただき, また原田の文の引用は原文のままとした。

文 献

- 原田準平教授還暦記念号：鉱物雑, 3, no. 6, 457-810 (1958).
 原田準平先生古希, 叙勲記念：pp. 1-26 (1968).
 国立旭川工業高等専門学校25周年記念誌(1987).

- 秋葉 力(1992)：名誉会員 故 原田準平君, 地質雑, 98, 821-822.
 針谷 宥(1992)：原田準平名誉会員を悼む, 鉱物雑, 21, 185-186.
 富坂武士(1992)：名誉会員原田準平博士の逝去を悼む, 岩鉱, 87, 303.

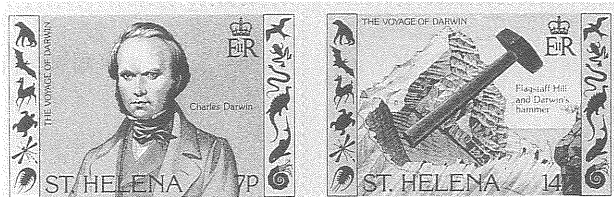
HARIYA Yu (1993): Professor Jyunpei HARADA and mineralogy.

〔受付：1993年6月25日〕

~~~~~ 地学と切手 ~~~~~

## 地質学者ダーウィン

P. Q.



1982年に, アセンション, フォークランド, セントヘレナ・ココス諸島・モーリシアスなどで, ダーウィン訪問150年記念切手が発行された。いずれも4枚1組で, 1枚はダーウィンの肖像が画かれ, 両側には三葉虫・アンモナイトなどの陰影が共通に画かれている。あとの3枚にはそれぞれダーウィンに関連する図柄が選ばれている。セント・ヘレナにはダーウィンのハンマーが画かれている。ダーウィンは1831年12月27日に軍艦「ビーグル号」に乗ってイギリスを出港した。南半球を回って帰って来たのは1836年10月だった。上記の国々を訪れたのは全部が1832年ではないが, 150年記念として統一されたい。1842年にサンゴ礁の研表を出版し, 「種の起源」の出版は1859年である。現在では彼は進化論によって生物学者であるとみなされ勝であるが, 彼がビーグル号航海に参加したのは地質学者としてであり, 航海中でも地質学者として終始した。サンゴ礁の起源についての考察もそのひとつである。

チャールズ・ダーウィン (Charles Darwin, 1809-1882) は医者の子に生れた。幼少の時から博物学に対する興味が強かった。父は彼を医者にさせるつもりでエディンバラ大学に入れ, 彼はそこで2年間医学を勉強したが, 医者になる気にはなれなかった。そこで父は今度は牧師にしようとしてケンブリッジに入れたが, 自然に植物学と地質学に移って行った。植物学はヘンズロー教授と親しくなり, 彼の野外教授にたえずついて行き, 「ヘンズローといっしょに散歩する男」とあだ名をつけられたほどだった。地質学はカンブリア系の研究で有名なセジウィック教授の下で勉強し, 教授と北部ウェールズの地質調査に出かけた。ライエルの「地質学原理」第1巻が出版されたのは1830年であり, その頃の英国は地質学の黄金時代だった。

ビーグル号の第2回航海に地質学者の同船を希望した理由の一つは, 海軍が, 基地としてのサンゴ礁の重要性を認めたことにあった。ダーウィンが世界回航の旅に出発したのは彼の22歳の時である。